



Title	「ラ・アラウカーナ」の推敲における一側面：ラ・インペリアルでのエピソード
Author(s)	吉田, 秀太郎
Citation	Estudios Hispánicos. 1986, 11, p. 17-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93773
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「ラ・アラウカーナ」の推敲における一側面 ——ラ・インペリアルでのエピソード——

吉 田 秀太郎

はじめに

文学史的な観点から見れば、イスパノアメリカの16世紀は、新大陸の発見と植民の記録文学の時代であったと言える。イスパニアのいわゆるクロニスタスが征服の模様や土着の人びとの風習などを克明に書き綴った。征服者たちと共に渡った伝導師たちの作品も多く知られている。これらの記録文学は、大ていの場合、散文によるものであるが、中には征服のドラマを格調高い韻文でうたい上げたものもあった。その代表的なものとして有名なのが、アロンソ・デ・エルシーリャの「ラ・アラウカーナ」である。この作品は、散文による記録物の大部分が文学的な価値よりも史料として珍重される場合が多いのに対して、史料としての価値もさることながら、スペイン文学が生んだ優れた叙事詩として高く評価されている。チリの原住民アラウカ族と征服に向ったスペイン人との戦いをうたったこの作品は3部から成り、オクタバ・レアル（11音節の8行詩）の形式で書かれており、第1部は15章までで、1569年に出版され、第2部は16章から29章までで、1578年に、そして第3部は30章から37章まで、1589年にそれぞれ出版された。第1部が世に出たときの評判の良さは当時の様々な文献からこれを知ることができる。セルバンテスも、あの名作の前篇で、著名な騎士道物語の中に、エルシーリャのこの作品の名を挙げていることはよく知られている。因みに、エルシーリャとセルバンテスは、ポルトガルで互いに知り合いの仲だった。この作品が当時のクロニスタや詩人たちに与えた影響は少なくない。ペルーの優れた文人インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベガの「インカ皇統記」にも、特に第1巻の26章以降にも見られるように、エルシーリャのこの作品を読んだことが明白である。事実、ガルシラーソのチリ征服に関する叙述には、「ラ・アラウカーナ」の影響がうかがえる。一

方、ペドロ・デ・オーニャの「手なずけられたアラウカ族」がエルシーリャの作品に触発されたものであることは言うまでもない。もっとも、この2つの作品の成立動機には違いがあり、叙事詩としての特色にも大きな相異があるのだが。つまり、オーニャの場合、征服者ドン・ガルシア・ウルタード・デ・メンドサが英雄となっているのに対し、エルシーリャの場合は、英雄はなく、むしろ戦うアラウカ族とスペイン人の集団となっている。実はこの点について述べようとするのが本論の目的なのであるが、今は、「ラ・アラウカーナ」の与えた影響について述べるにとどめておきたい。「ラ・アラウカーナ」の研究も地味ではあるが優れたものが多い。ドン・フランシスコ・ビダール・ゴルマスは1871年、「ラ・アラウカーナ」を片手に、征服者の歩んだ道を踏査し、地理的確認を行い「エルシーリャとチロエの発見」と題する貴重な論文をその翌年発表している。しかし何といっても欠かせないのが、チリの硯学、ホセ・トリビオ・メディーナの研究である。特に1916年から18年にかけて出版された研究の4部作は、作品の解釈、登場人物、地名、そして作者の伝記的側面などについての広範で精緻な研究となっている。

さて、さきに少し触れたように、「アラウカーナ」の叙事詩としての特色として、特定の人物が英雄となっていないこと、具体的には、彼の上司であったドン・ガルシアの存在が故意とも思えるほどに、この作品に軽んじられていることに関連して、その理由を可能な限り審かにすると共に、作者の人間像を明らかにするのが本稿の目的である。エルシーリャがドン・ガルシアに対して好意を抱かなくなった発端とも言えるのが、チリのラ・インペリアルでのできごとであったことは想像に難くないが、その事件の詳細と背景に言及する前に、作者の伝記的な側面を簡単に述べておきたい。

エルシーリャの家系

エルシーリャ (Alonso de Ercilla y Zúñiga) が由緒正しい家系の出身であったことは、彼の父が国王カルロス五世の参議官の一人であったことから窺える。ただ、彼はエルシーリャがまだ1才のときに世を去ったために、6人の子供を抱えた母のレオノールは、とりわけ1545年の相続権争いで亡夫の Bobadilla の土地を失ってから苦しい生活を強いられた。エ

ルシーリャの6人兄弟のうち長兄は1545年に死亡、次兄は僧侶となり、3人の姉妹と彼とが母と共に暮らし、母から教育を受けた。父の死後しばらくは父の親友だったナヘラ公爵の家か又はボバディーリャに住んでいたらしい。母は、亡夫がカルロス5世に仕えていた頃、国王の覚えがめでたかったこともあって、マリア王女の侍女となることができた。1548年のことである。この年、マリア王女はハンガリーとボヘミアの国王だったマクシミリアーノと結婚した。

レオノールはエルシーリャをフェリペ王子の小姓にしてもらうことに成功したが、これは彼女の才覚もさることながら、その血筋の確かさをも物語っている。

すでに少しばかりラテン語を学んでいたエルシーリャは、宮廷での習慣に従って、他の小姓たちと共に、教育を受けた。教師は著名なラテン学者であり人文学者でもあったクリストーバル・カルベージェ・デ・ラ・エストレーリャだった。

こうして、エルシーリャは15歳から22歳にかけての7年間を王子の側で過ごしたのであるが、その間、王子に伴って各地を旅行している。1548年にはフランドルへ旅をしているが、途中、バルセローナ、ジェノバ、ミラノ、トレント、インスブルック、ミュンヘン、ハイデルベルク、ブリュッセルなどを訪れた。王子の帰国後、エルシーリャはマリア王女の随員の1人として母と姉妹と一しょにウィーンへ行き、そこにしばらく滞在した。ウィーンからの帰国がいつだったかは正確にはわかっていないが、1554年に彼がバリャドリーにいたことは確かである。

チリとの出会い

1554年、彼はフェリペ王子に従って英国に行くのであるが、この年は王子にとってはマリア王妃との再婚の年であり、エルシーリャにとってはチリ総督だったヘロニモ・デ・アルデレーテと知り合った記念すべき年であった。この国に滞在中、彼はエルナンデス・ヒロンが国王に対し謀反を起こしたこと、またチリの長官であったバルディビアがアラウカ族の手にかかって死んだことを知った。当時22歳の彼は、夢を求めて、アルデレーテ総督の遠征隊に加わる決意をし、願い出て許可を得た。こう書けば極めて理由は明瞭であるが、実は本当の理由は必ずしもこの通りではない。彼は

「ラ・アラウカーナ」の中でもしばしばほのめかしているが、21歳の頃に味わった失恋の苦しみから抜け出したかったようである。その苦しみがいかに大きいものであるかを、エルシーリャは、彼の初期の作と思われる詩に詠っている。そうでなければ、宮廷での何不自由ない恵まれた生活をわざわざ捨てて戦地に赴くには根拠が余りにも薄弱である。すでにペルーではアンドレス・ウルタード・デ・メンドーサが副王に任ぜられており、チリはペルー副王の管轄下にあった。エルシーリャの他に、王子に仕えていた2人の小姓、フランシスコ・デ・アンディア・エ・イララサバルとシモン・ペレイラも同行を決意した。そして一行は1555年の秋、サン・ルカル・デ・バラメダを発ったのであるが、一行の中には新副王と共に彼の息子ドン・ガルシアとドン・フェリペの二人もいた。エルシーリャが英国にいた頃にはまだ帯刀を許されていなかったが、出発した時期にはすでに許されていたことが確かめられている。新大陸に向かう艦隊の旗艦には、17人の女性が乗っていた。他の艦には10人以上の女性は乗せないことになっていたそうである。彼女らはやがて現地で町を建設するときの責任者になるなど、地位のある女性だった。その中にはもちろんアルデレーテ総督夫人もいた。彼女らのうちの誰かは、やがてチリでエルシーリャにふりかかる事件で、彼の命の恩人になったと思われるふしがある。少し脇道にそれるが、イスパノアメリカの人種構成がいわゆるメスチソである理由として、征服当初は約半世紀の間、スペイン人が独身でこの地に乗りこんだことがあげられるが、しかし当時から、植民地の形成の過程で、次第にスペイン女性が新大陸に渡りはじめていた。主として、高級官僚の夫人たちであった。

さて今回の船旅は、途中嵐に遭うなどして長い期間かかったが、遂にノンブレ・デ・ディオスに着き、地峡を渡って、パナマで再び乗船したのであるが、ここでアルデレーテ総督は熱病にかかり、タボガ島に移される。そして1556年4月、他界した。エルシーリャは初志を貫き、リマに向かった。

リマでエルシーリャは大きな広場に処刑されたエルナンデス・ヒロンの首が鉄の檻に入れられたまま放置されているのを目撃している。

この頃、チリでの戦況は、アラウカ族の激しい抵抗に遭って、スペイン人にとっては好ましいものではなかった。アラウカ族の勇ましさは有名であり、エルシーリャも、「ラ・アラウカーナ」の中でその愛国心と勇敢さに惜しめない讃詞を贈っている。現地からは救援を求める使者が駆けつけ、

アルデレーテ総督を失った新副王は自分の息子のドン・ガルシアを彼に代って任命した。そして急拠、遠征隊を編成したのであるが、すでに戦列から引退していた老兵までが狩り出された。エルシーリャも当然、この軍に加わった。兵士の他に、例によって各種教団の僧侶やリマの裁判所の判事でもあったエルナンド・デ・サンティジャンをはじめとして、金持ちのエンコメンデロたちも含まれていた。

1557年の2月21日、エルシーリャをはじめあらゆる階層の人を乗せた艦隊が勇躍、カリャオの港を出た。エルシーリャは総督と同じ船に乗っていた。一方、それに先立って、陸路を150人の騎馬兵がチリ目指して南下した。

こうして2カ月と21日の長旅の末、コキンボまたはラ・セレナの町に到着した（両方とも近接した都市である）。救援軍はここで大いに歓待され、そしてドン・ガルシアは新総督として恭々しく迎えられ、フランシスコ・アギーレ隊長の家に投宿した。今は年老いたこの隊長は歴戦の勇士だった。総督は、サンチャゴの主だった人たちからの招待を受けたが敢えてこれをことわり、土地の人たちの忠告に碌に耳を貸さずに、冬が迫ろうとしている6月21日、再び2隻の船に150人の兵を乗せて更に南へと下っていった。この中にはエルシーリャも含まれていた。ひどい嵐に見舞われながらも、28日の明け方、一週間ぶりにキリキナ島を望むペンコに一行はたどりつく。この航海の様子は「ラ・アラウカーナ」の第1部の最終章に生き生きと描写されている。船からは小高いところに戦いの準備を整えたインディオが待ち構えているのが見える。ところがスペイン人にとって幸いなことに、そこに上陸したちょうどその時、大音響を立てて隕石が落下し、インディオたちが退散した。スペイン軍は荒れた小屋や洞窟の中や草むらを探して、隠れていた何人かのインディオを見つけ、ドン・ガルシアの所に連行するが、彼は捕虜たちをていねいに扱い、おまけに一人一人にプレゼントまでしたりして、カトリック教徒に改宗するよう、そしてスペインの国王に忠誠を誓うよう積極的に働きかけた。

エルシーリャが不朽の名作「ラ・アラウカーナ」を書きはじめたのは恐らくこの日であったものと思われる。

総督をはじめ兵士たちが苛酷な天候に苦しめられていたとき、バルパライソから派遣された船のうちの一隻が食糧を運んできてくれた。兵士たち

の報告では、近くの岬に、比較的手軽に要塞が築ける場所があるという。そこで、早速、新しい要塞がペンコに築かれ、国王の旗が掲げられ、国王フェリペ2世の名において占領された。ぜひ船中に残っているべき者を除き、全員が守備についた。

スペイン軍は絶えず敵に悩まされながらもそこに滞在した。記録によれば、エルシーリャは8月10日の夜、歩哨に立っていたが、その夜、敵の襲撃があった。勇敢なアラウカ族の方にもかなりの犠牲者が出た。偶然の一致だが、その同じ日に、スペイン本国では、スペイン軍がかの有名なサン・キンティンの戦闘でフランス軍に大勝したのであった。従って、エルシーリャとしては「ラ・アラウカーナ」の中で、この事を扱ったとしても無理からぬことである。もっとも、これを、叙事詩としての一貫性に欠ける要素だとして非難する学者もいるのではあるが。

11月に入り夏がやってくると、征服者は内陸部へと前進し、ビオ・ビオ河を渡るときふたたび戦闘が展開された。この戦いでエルシーリャは危く一命を落とすところだった。結局、この戦いはスペイン軍の勝利で決まり、アラウカ族に多大の損害があった。ビオ・ビオ河での戦いに次いでミジャラプエの戦いがあった。更にこれに続いてプレンの合戦があるのだが、エルシーリャによれば、これこそ最も血なまぐさい合戦であった。この戦いでスペイン軍は勝利を収めたが、同時に高い代価も支払った。

多大の犠牲を払ったスペイン軍は疲れ切ってトゥカペルに着き、更にラ・インペリアルへと進む。エルシーリャはここからカニエーテに向かい、ここで有名なアラウカ族の隊長カウポリカンの襲撃を受ける。しかし結局アラウカ族は敗れ、隊長は無残な殺され方をする。

1558年の2月、ドン・ガルシアはマゼラン海峡への遠征を企てている。この理由として、すでに当時スペイン軍の占領した土地はいわゆるエンコミエンダとして戦いに功績のあった者たちに分与されていて、余分な土地がなく、大勢の兵士をかかえたいま、新たに彼らの功績に報いるための土地を探してやらねばならないからであった。栄光と黄金を夢みる約200人強の団は人跡未踏の森や山に分け入りながら南下し、11日間かけてレロンカビー湾にまで達した。その時の苦労話は、まさにこうした征服という一大できごとならではのものがあつた、読む人の胸を打つ。湾に達した一同は誰からとなくひざまづき、危険から身を守って下さった神に感謝した、

と第3部の第36章に記している。

一行は土地の原住民からの訪問を受け、丸木舟に積んで運んできた食べ物をもたらした。2人の酋長からは羊1頭とビクーニャ2頭をもたらした。南下の旅でチャカオ水道を見つけ、エルシーリャは「体格のよい勇敢で向う見ずの」兵士10人を連れてそこを横切り、チロエ島に達した。これが遠征隊の一行が到達した最南端であった。マゼラン海峡はまだまだ遥かに遠かった。チロエ島に渡った時の感動ぶりが、森の中に分け入って、とある木の幹に名前と日付を記念に彫りつけた件（第3部第36章）を読むとひしひしと伝わってくる。時に1558年2月28日午後2時のことだった。因みにチロエ島は今も神話と伝説の豊庫として、美しい海岸に取り囲まれた自然の姿を見せてくれている。

翌日、遠征隊は帰途についた。マゼラン海峡を目指していた割には早々と引揚げたものである。さて、途中ドン・ガルシアは新しい町を建設し、それをオソルノと名づけた。祖父オソルノ伯爵に因んだ名前である。そこからは今日、同じ名前の火山の、富士山そっくりの美しい姿がジャンキーウェ湖の水面に影を落しているのが見える。遠征の目的が達成され、エンコミエンダが割り振られた後、ドン・ガルシアはバルディビアに向かい、そこから更にラ・インペリアルに赴いて、ここで越冬することになった。

ラ・インペリアルでのできごと

ラ・インペリアルでのひとときは、征服者たちにとって身も心も安まる楽しいものとなるはずであった。エルシーリャは、すでに即位していたフェリペ2世に長い手紙を書き、即位のお祝いの言葉に添えて、新大陸で過ごした4年間の生活の模様を報告した。都合のよいことに、ラ・インペリアルには、さきにバルディビアやビジャグランに伴って戦闘に加わった人たちが居合わせ、彼らからそのときの様子を聞くことができた。これはまた彼が「ラ・アラウカーナ」を執筆する上で非常に役に立った。因みに、エルシーリャがこの頃の暇な時間を見てこの作品を書き続けていたことは言うまでもない。

しばらくして、ドン・ガルシアは武芸大会の開催を命じた。その内容について、歴史家ゴンゴラ・マルモレホは *juego de cañas y correr sortija y estafermo* だったと記している。エルシーリャはこれを *justa y desafío*

と表現している。コバルビアスによれば、*sortija* とは *juego de gente militar* であって、騎馬で走りながら槍先で一定の距離にある *sortija* つまり輪を突く競技である。この種の競技は当時スペインでは騎士の間でよく行われていたものであり、チリでもすでにこの頃までに何度か催されたことがあった。例えばバルディビアがまだコンセプションにいた頃の1537年に行われた記録がある。この催しの動機についてはクリストバル・スアレスによれば、フェリペ2世の即位を祝うためのものとなっているが、そうだったと判明しているわけではない。エルシーリャはこの仕合いによい成績を収めようと、ペドロ・デ・ソトという男から200ペソを出して（実は借りてだが）馬を手に入れた。6月27日のことである。

その月の下旬ないし翌月の上旬に仕合いがあった。ドン・ガルシアもこの催しに顔を出した、いや、実は覆面をして家の裏口からこっそりと外に出た。いわゆる「お忍び」である。こうした習慣は、トリビオ・メディーナによれば決して珍しいものではなく、カルロス5世も時々行ったそうである。ただ、このことは、先に述べた催しの理由に疑念をはさむ余地のある証拠ともなっている。もしも公式の行事なら、何も覆面の必要はなかったのではないかと考えられるからである。ともあれ、事件はこのときに起こった。ドン・ガルシアをはじめ主だった人たちが馬に乗って進んでいた。その中にエルシーリャとペドロ・オルモス・デ・アギーレが並んでドン・ガルシアの側にいた。この男はチリの住人で、夫人と娘1人の3人暮らしだった。エルシーリャは多分、この人の家に泊っていたものと思われる。突然、2人の間にドン・フワン・デ・ピネダが割りこんできた。このピネダとエルシーリャの間に二言三言交わされるや否や、エルシーリャは刀に手をかけた。このことについて、彼は晩年、「ラ・アラウカーナ」の中で、

Que fue sólo poner mano a la espada

Nunca sin gran razón desenvainada

（第3部36章第33連）

と言って、刀を抜くにはそれなりの理由があったのだ、と弁明し、正当化している。一方ピネダも、伝記作家ゴンゴラ・イ・マルモレホによれば *hombre díscolo y atrevido* だったから、たちまち騒ぎが起こった。これを見てドン・ガルシアは、エルシーリャの言をかりれば *genio «acelerado»*

を抑え切れずに、鞍橋にかけてあった槌矛で何度も激しくエルシーリャの肩をなぐりつけ、到々落馬させただけでは満足せず、時を移さず2人を翌日斬首の刑に処すべしと言いつ渡した。クリストバル・スアレスによれば、他の者たちへの見せしめのため、軍の規律を破る者は厳罰に処すことを徹底させるべく、このような処置に出たと説明しているが、それにしても側近の部下に対する処置としては、もしそれだけの理由ならいささか厳し過ぎるように思われる。エルシーリャは彼の作品の中で(第3部第36章)、その仕打ちを次のように表現している。

el enorme delito exagerado

この言葉にはドン・ガルシアに対する強い不満の念がこめられている。ところでピネダはこの様子を見て急ぎ教会堂に逃げこんだが、やがてドン・ルイス・デ・トレド大佐に連れ出された。ゴンゴラ・イ・マルモレホは2人ともヌエストラ・セニョーラ教会に逃げこんだとあるが、トリビオ・メディーナは否定的である。ひどい打撃を受け落馬したエルシーリャにとって、これは考えられないことだというのが反対の理由である。

ところでこの事件の詳細については歴史家の間で意見はまちまちである。クリストバル・スアレスによれば、フワン・ピネダが割りこんだから喧嘩になったのではなく、どちらが優位であるかをめぐって口論となったのだ、しかもその争いに併せて一般の人でも抜刀するという騒然とした状態になったので、ドン・ガルシアはこれはてっきり2人の仕組んだ謀反ではないかと思い罰した、ということである。更に、ピネダの伝記作家、カランチャ神父によれば、エルシーリャとピネダとの争いの原因は、これまでの説とはかなり違っているからややこしい。彼によれば、例の催しの際、序列の問題で2人の間に争いが起こり、ピネダの方が先に、自分が位が上だと称してエルシーリャの前に割りこんだ。仲裁者が取りなしてその場は収まったが2人の間のしこりはほぐれなかった。翌日、ドン・ガルシアが教会に部下たち一同を連れて行ったとき、例の2人は又もや席のことで互いに譲ろうとしなかった。フワン・デ・ピネダが先に口出しし、それを支える形で劔を抜いたので、貴族としての、又軍人としての血がさわぎ、友人たちはピネダを応援し、ピネダを日頃快く思わぬ人たちやエルシーリャ

と起居を共にする人たちがエルシーリャに味方して、双方入り乱れて教会という場所も、総督の前であることもかえりみず大騒ぎを起こした。ドン・アロンソの味方の者はまるでアラウカ族であるかのように振舞い、又、ピネダは教会をまるで戦場のように振舞ったのでドン・ガルシアは2人を死刑に処した、ということになる。

ところで、斬首の刑は絞首刑の場合と異なり、オヘダ神父も例の *La Cristiada* の中で述べているように *gente ilustre y generosa*, つまり貴族のための死刑の方法である。そう言えば、エルナンデス・ヒロンの死刑も斬首であった。ドン・ガルシアは2人に刑を言い渡すと、家に閉じこもって誰にも会おうとしなかったし又面会をも固く禁じた。とはいえ、実際には主だった人々が刑の軽減のための嘆願を行っている。ただしいずれも失敗に帰したのではあったが。夜が更けて、獄舎では何人かのざんげ僧が付き添い、あとは処刑を待つばかりだった。2人に好意を抱いていた人たちはそれでも何とかして彼らを救いたいと思い、最後の手段として、兼ねてドン・ファンが親しくしていたある女性に頼みこんで、減刑のとりなしを依頼した。この女性がはたして誰であったのかは定かでない。しかし「エルシーリャの生涯」の作者トリビオ・メディーナによれば、後にサンチャゴ市の住民となったドーニャ・エスペランサ・デ・ルエダ（アルデレテ総督の未亡人）の同僚たちで、エルシーリャと同じ船でやってきた17人のうちの1人であったに違いないという。彼女は承知してくれた。そして土着の若い女性を連れてドン・ガルシアの家を訪ね、何度呼んでも扉を開けてくれないので、彼女らにそこまでついてきた人たちの助けを借りて2人は窓をよじ登った。こうしてその晩彼女は懸命に説得につとめ、翌朝、誰もがもはやあきらめていた頃、というのも、2人の囚人はすでに刑場に連れ出されていたからであるが、ペドロ・デ・ポルトゥガルという総督の衛兵の1人が刑場に走り刑の執行の中止命令を伝えたのである。こうしてエルシーリャとピネダの命は危く事なきを得たわけである。2人の助命嘆願を行ったその女性は、どんな代償を支払ったのであろうか、これは誰しも知りたいところであるが、トリビオ・メディーナは、このことに関して「恐らく、ひたすら彼をなだめ、約束をしただけだろう」と述べている。それにしても1557年にラ・インペリアルに在住の女性の名前がその後の研究の結果全部わかっているわけであるが、これはと思しき女性がみんな結婚して

いることから上のようなトリビオ・メディーナの言葉が生まれたのであろう。

エルシーリャは死刑を免れたが、ドン・ガルシアの心象は決してよくなかった。エルシーリャにしてもこの事件を決して快く思っていなかったことは確かである。やがて国外追放になるのだが、その間の3カ月はなおも囚人として扱われた。彼は作品の中で、とにかくあの獄中生活が理不尽 (impertinente) だったのみか、長い (larga) ものだったと回想している。彼がいかにこの事件でドン・ガルシアに恨みを抱いていたかは第37章70連にある次の詩行から痛いほどよくわかる。

Ni digo cómo al fin por accidente
del mozo capitán acelerado,
fui sacado a la plaza injustamente
a ser publicamente degollado;
ni la larga prisión impertinente
do estuve tan sin culpa molestado,
ni mil otras miserias de otra suerte
de comportar más graves que la muerte.

ここでは *injustamente*, *sin culpa*, *larga prisión impertinente* といった言葉の中に、詩人のやる方ない気持が巧みに表現されている。

このような事情を考慮に入れるとき、「ラ・アラウカーナ」の中で、最も中心的存在となるべきスペイン軍の長官の影が薄くなっている理由の一端が理解できるように思えるのである。エルシーリャはこの叙事詩を書くに際して、このことが絶えず念頭にあったのではないか。その証拠として、すでに第1部第4章に時ならずもそれをほのめかす文章がある。第1連から第5連までは、アラウカ族を懲らしめるかに見える文面の裏に、ラ・インペリアルでの苦々しい思い出が潜んでいる。しかし、第1部が世に出た当時、これを明らさまに書くことは得策ではないと作者は判断したに違いない。それが、このような表現となった理由と考えられる。彼の赤裸々な心情の吐露が、第3部の、彼の晩年の作に至ってはじめて見られるのも、その頃すでに新しい副王の時代になっていたからである。

エルシーリャとピネダのその後

最後に、ラ・インペリアルでの事件の主人公たちのその後について少し触れておきたい。

エルシーリャは1558年の12月の末か翌年1月の初旬にコンセプション港を発ち、チリと最後の別れを告げた。幾多の戦闘に加わり、彼の言うように *tanto afán y tanta sangre* を注いだにもかかわらず、功労者にあるはずのエンコミエンダも賞金も得られなかった。1559年2月末にカリャオ港に着き、そして間もなくリマに着いた。リマでは同様にメンドーサに追放された同僚たちに会った。副王は、当然のことながら彼を余り歓迎せず、金銭的に困窮しても何ら手を貸そうとはしなかった。そこでフェリペ国王に手紙を書き、チリでのできごとを細かく報告、目下窮状にあることを述べて、彼の父がかつてカルロス5世にお仕えしていた縁で、とにかく6千ペソを下らない収入のある土地を下賜されるよう懇願した。ということは、できればペルーに住みつくつもりだったのかも知れない。国王は承知し副王に功績と人柄に見合う報酬を与えるよう命じたが、実際にはそれから1年余り待たねばならなかった。勅令が届くのに手間どったのか、副王の所業なのか、それとも空席がなかったためかは定かでない。やがて副王の近衛隊の *gentilhombre lanza* に任ぜられることになる。トリビオ・メディーナによれば、この近衛隊は「武勲高く、国王への忠誠心を行動で示し保証された軍人からなる隊」とのことである。

この職について間もなく、新しくニエバ伯爵が副王となり、エルシーリャの生活は快適なものになった。しかし生来の冒険好きな性格から、その職に安住できず、副王に頼んで2年間ペルーを留守にする。母の病気について知らせを受けたためと考えられる。その前に、ロペ・デ・アギーレの横暴を懲罰するための遠征隊に加わっている。ロペ・デ・アギーレは今のベネズエラのアマゾン地域で悪事を働いていたのだ。エルシーリャはパナマに向うが、そこですでに例の男が処刑されたことを知る。ここでも彼はクリストバル・ラミレス・デ・カルタヘーナと争いを起こすが大事に至らずに済んだ。スペインに帰るためノンブレ・デ・ディオスに行く途中で奇病にかかり、しばらく足止めを食うが遂に1563年の6月、8年間にわたる長い海外生活の末に祖国の土を踏んだ。マドリードに赴き、国王フェリペ2世に海外での生活の積る話をし、国王からは大いに気に入られる。

やがて母が死に、妹のドニャ・マリア・マグダレナがドン・ファドリケ・デ・ポルトゥガルと結婚するや（1565年初頭）新婚中の妹の家に世話になる。しかし同年4月に妹が他界するに及んで又もや1人暮らしの生活に戻る。ただし遺産を受けて経済的には恵まれる。更にリマでの近衛隊の職にかかわる報酬を請求して、その職を辞めるという条件で認められ彼はかなりの財を蓄積した。1568年にはラファエル・デ・エスキーナという身分の低い無学な女性との間に一子をもうけるというハプニングもあったが、万事順調にゆき、1569年には例の叙事詩の第1部を出版、好評を博したことは先に述べた通りである。

1570年にマリア・デ・バサンという貴婦人と結婚した。フェリペ2世の2番目の后イサベルの侍女をつとめたこともある女性である。彼女の母は金持ちの男性と結婚させたがっていたが、エルシーリャと娘との噂が立つと間もなく2人の結婚を許したということである。1571年にはサンチャゴ騎士団の騎士となる。そして1574年、しゅうとめの死によって莫大な遺産を得た。妻に財産の管理を任せてローマ、ドイツなどを長い間旅行し、78年に戻ってきて第2部の発行に力を注いだ。1583年には書籍検閲官となり、この職を通じてマドリッドで当時の有名文人と知り合った。

1589年に第3部を出してから、晩年 *prestamista y usurero* となったことは注目に値する。彼は1594年11月29日に世を去った。

以上がエルシーリャのその後の足どりと活動の概略である。

ところで一方のフワン・デ・ピネダの方はどうなったか。ピネダに関しては、いわゆる史料となるものは見つからない。この人物の名はむしろエルシーリャの作品によって知られるようになったといつてよい。あのような事件にもかかわらず、エルシーリャは彼のことを讃えている。ミジャラプエでのピネダの勇姿はあるが、ラ・インペリアルでの件に関して彼の名前がでることはない。

こうした中で、カランチャ神父が1638年に出した *Crónica moralizada de la Orden de San Agustín en el Perú* (Barcelona) の中のピネダに関する事項は貴重なものとされている。セビリヤ生まれのピネダは、父が市会の書記をしていた。カランチャはピネダの血筋が高貴であることをしきりに強調している。一方、もう1人の叙事詩人ペドロ・デ・オーニャもその作品の中で、特にビオ・ビオ河での戦いのスペイン兵の活躍ぶりを描く

中で, noble caballero de Pineda と書いている。彼の性格については, carácter brioso y de «condición precipitada» という評価がなされている, こうした情報にもかかわらず, チリでの活動ぶりを示す証拠は何もない状況である。ただ, 例の事件後, 彼も同様に追放の身となった。カリャオ港に向う船中で, 彼は同僚たちに, 自分は僧侶になるつもりだと言っていたそうであるが, 遂に1560年の3月27日にアグスティン派の僧侶となった。そして1566年までリマにいた。その年, ヤゴンの教区長となり, 71年にはコンチューコのそれになった。更に1676年には definidor mayor という職についてコタバンバに赴任し, そして又コンチューコへ戻った。そして1582年には, 教団の聖職者会議のためにリマへ行き, その後も, コタバンバとリマを往復している。1591年にはリマに最終的に落着き, 老齢と病のため, ナスカ修道院に引きこもって, そこで1606年に他界したことだけが判っている。

エルシーリャが晩年経済的に恵まれたのに対し, ピネダは俗世を去って精神の世界に生きた。

かつて戦場で有名を馳せた2人のその後の生き様には誠に興味深いものがある。

主な参考文献

José Toribio Medina: *La Araucana, Vida de Ercilla*, Santiago de Chile, 1916.

Idem: *La Araucana, Edición del centenario, Ilustraciones*. Santiago de Chile, 1917.

Idem: *Idem: Ilustraciones-II*, 1918.

Idem: *Idem: Documentos*. 1918.

テキストとして

Alonso de Ercilla, *La Araucana*, Ed. Porrúa, "Sepan cuantos..." Núm. 99, México 1972.